
【仮面ライダー】ハヤテのごとく！【カブト】

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【仮面ライダー】ハヤテの「ごとく」・【カブト】

【Zコード】

Z3577F

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

突如、マリアの前に現れたウカワーム。彼女はそいつに擬態されて……

第1話（前書き）

連載始めました。最後まで付き合って頂けると幸いです。では

第1話

練馬の東側に位置する二千院家の広大な敷地。そこで、大勢のセキュリティポリスがワームといつ緑色をした怪物の集団と戦闘を行つていた。

いくつもの弾丸が縦横無尽に飛び交う中、一匹のワームが脱皮をしてウカワームというシオマネキを模した白いワームに姿を変えた。ウカワームは目にも留まらぬ速度、クロツクアップで飛び交う無数の弾丸の間を縫うように駆け抜け、全てのSPを空中へ吹き飛ばした。

何が起こったのか理解出来ないSPは、地面に叩き付けられ、数人が意識を失つた。

「くそっ、我々では歯が立たん！ マリアさんを呼ぶんだ！」
体格のいい男が叫ぶと、SPの一人が携帯電話を取り出した。その後、メイド服に身を包んだマリアといつ美少女が現れた。
「何ですか、この状況は！？」

マリアはワームの集団を見て驚いた。

「マリアさん、後はお願ひします……」

筋骨隆々とした男はそう言い残すと氣を失つた。

（な、何だか分かりませんが、やるしかなさそうですね）

戦闘体勢に入ったマリアは、敵陣へと突っ込もうとした。その瞬間、自分と同じ顔の女性が目の前に現れた。

そいつはニヤリと微笑み、ウカワームに変態。クロツクアップでマリアに襲い掛かり、あつという間に肉の塊にした。

ウカワームはマリアに擬態し、「貴方たちも擬態を済ませなさい」とワームたちに言つ。

ワームは一斉にSPへ擬態。本物を始末して去つていつた。

それと入れ替わりに、三千院 凪といつ金髪ボーテールの少女が現れた。

「よつ、マリア。先刻まで騒がしかつたみたいだが、何か遭つたのか？」

「S.Pの方たちが訓練をしていたみたいですね」

「そうか。ところで、後ろに倒れているそいつは何だ？」

「えつ、これですか！？」

マリアは慌てた様子で後ろの肉塊にくかいをどこかへ放り投げた。

「何でもありませんわ」

マリアはそう言つて苦笑をした。

ナギは疑問符を浮かべながら戻つていった。

銀杏商店街の一角にある喫茶店 どんぐり には、水色頭の少年とどじにでも居る普通の少女の姿があつた。

少年の名は綾崎あやさき 鳩。少女は西沢にしざわ 歩といつ。

「普通つて何かな！？」

普通の少女が天井を睨め付けながら叫んだ。

「どうしたんですか、いきなり？」

ハヤテが不思議そうな顔で訊ねると、歩が彼に顔を向けて言つた。

「今、ナレーターが私のこと普通つて……」

「はあ……」

可哀想な者を見るような目をしながら素つ氣無い返事をするハヤテ。

「何かな、その態度は！？」

「いえ、別に……」

ハヤテは腕時計で時間を確認しながら返答した。

「ああ、そろそろ僕、屋敷に戻らなくては。今日まだしきりそつをまでした」

ハヤテは言うと席を離れて出入り口に移動する。

「ちょっと待つて！ 私の奢りなのかな！？」

「え、違うんですか？」

「自分の分ぐらい払つて欲しいかな！」

「では立て替えといで貰えますか？ 僕の財布の中、今は空っぽなので」

ハヤテは財布を取り出して引っくり返した。しかし、中からは何も出てこなかつた。

「実は先刻、ヒナギクさんにご馳走してしまつて」

言つて苦笑するハヤテ。

では と、彼が喫茶店を出た直後、携帯電話が鳴り響いた。ハヤテは直ぐ様取り出して応答する。

「はい、綾崎です。……解りました。直ぐに行きます」

ハヤテが電話を仕舞い、駆け出そうとすると、田の前にもう一人の自分が現れた。

そいつはニヤリと笑つてワームに変態。徐にハヤテに近付く。

「…………！？」

驚いて後退しようとするハヤテだが、背後にはドアという壁。逃げ場を失つた彼に、ワームが容赦なく接近。そして襲撃者は腕を振り被つた。

(殺られる！？)

そう思つた時、横から光弾が飛来。ワームにヒットして怯ませる。ワームは咄嗟に振り返つて走り出した。その先には、腰に巻いたベルトにゼクターという赤いカブトムシ形のメカを装着した何者が立つていた。

そいつは手にした銃と斧が一体になつたカブトクナイガンという武器を迫り来るワームに叩き付けた。

必殺技のアバランチブレイクを食らつたワームは爆裂霧散。爆風に巻かれたハヤテは吹つ飛びそうになつたが、何とか堪えた。

「貴方は、一体……？」

ハヤテは目の前の何者かに訊ねた。しかし、そいつは無言で背を向けて去つていく。

「待つて下さい！」と、追い掛けて前に回り込むハヤテ。「せめて

貴方のお名前を訊かせて下さい」

カブト、そいつはそう名乗つて彼の前から姿を消した。

(そうだ、こうしちゃ居られない !)

急用を思い出したハヤテはその場を後にした。

三千院家屋敷の一室で、ツインテールのナギとロングヘアのナギが睨み合っていた。

「何者だ、お前！？」

「お前こそ何者だ！？」

互いの目から放たれた細い光りの線がぶつかり合つてバチバチと火花を散らす。

そこへ、マリアが現れて言った。

「まだ始末していなかつたのですか？」

ロングヘアのナギは振り返り、「殺る気が出ないんです」と答えた。

「では私が殺りましょう」

マリアはそう言い放つと、ウカワームに変態した。

「…………！？」

驚き戸惑うツインテールのナギを余所に、ウカワームは彼女の懷へ一瞬で移動し、振り被つた巨大なハサミを一気に振り下ろ……そうとしたが、しかし、既のところで何者か　いや、ハヤテが現れて受け止めた。

「お嬢様に手を出す者は僕が赦しません！」

「ちょっと待て、ハヤテ。そいつは私の偽物を退治してくれよ」と

「…………！」

ハヤテはロングヘアのナギとツインテールのナギを交互に見た。

「ナギの言つ通りですわ、ハヤテくん」

ウカワームはマリアに擬態して言った。

「えっ？」

「ま、マリアさん！？」

「違うぞハヤテ！ 私が本物だ！」

ツインテールのナギの言葉に、「解つてますよ」とハヤテが答える。

「貴方、緑色の怪物の仲間ですね。マリアさんはどこですか？」

「何を言つてるんですか、ハヤテくん。私がマリアですか」

「違う！ お前はマリアさんに化けただの怪物だ！」

「ハヤテくん、ワームは擬態をするとその人の記憶を引き継ぎます。だから、私がマリアなのですわ」

それより と、続けるマリア。「ナギの偽物を退治出来ないので、手を放して頂けませんか？」

「いや、貴方が殺ろうとしているのは本物。だから退く訳にはいきません」

「そうですか。では死んで下さい」

マリアはウカワームに変態し、ハヤテを反対の手で払つた。

「うわっ！」

吹っ飛び壁にめり込むハヤテ。

ウカワームは身動きの出来ない彼に接近してトドメの一撃を浴びせようとするが、しかし、どこからともなく飛来した光弾を食らつて怯んだ。

「…………！」

ウカワームは光弾が飛んできた方を向いた。その先にはカブトクナイガンを構えたカブトが立っていた。

カブトはウカワームの懐へ行き、蹴り飛ばしてハヤテを壁から救出した。

「ナギを連れて逃げなさい」

カブトはそう言いながらワームに変態して襲い掛かつてきたロングヘアのナギをカブトクナイガンで叩き付けて粉碎した。

直後、クロックアップしたウカワームの攻撃を受けたカブトが宙に舞つた。そして壁にぶつかって落下した。

ウカワームはマリアに姿を変えて言つ。

「何者ですか、一体？」

カブトは立ち上がり様に、「それは「こひのセリフ」と答えた。

「私はマリア。三寺院 凪に仕えるメイドですわ」

「本物はどこ？」

「さあ？ たぶん、敷地内のどこかに転がってると思いますわ」

「殺したのね」

カブトはゼクターの角を起こして装甲を浮上させる。

「キヤストオフ」

ゼクター ホーンを展開。「Cast off」と、装甲が弾け飛び、カブトムシを模した赤い上半身がその姿を見せた。

「Change beetle」

「うつ！」

吹つ 飛ぶ装甲に巻き込まれたハヤテは呻き声を上げて宙に舞い上がる。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックルを叩く。

「Clock up」

その瞬間、カブトはウカワームに変態して襲い来るマリアの攻撃を受け流して反撃。ウカワームは体勢を崩し、床に転がった。

「One, two, three」

と、カブトはゼクターの三つの足についたフルスロットルを順番に押してゼクター ホーンを反対側へ倒した。

同時にウカワームが立ち上がり、静止しているカブトに襲い掛かる。

「ライダーキック」

カブトは頃合いを見計らつてゼクター ホーンを展開。「Ride

「kick」という電子音と共に回し蹴りをウカワームの頭にお見舞いした。

「うつ！」

ウカワームは呻き、頭を押さえて蹠踉めぐ。

「Clock over」

その音の直後、宙を舞っていたハヤテが床に落下した。

ウカワームはマリアに姿を変え、その場に倒れて氣を失った。カブトはハヤテの前に移動して手を差し出す。

「立てる?」

ハヤテはその手を掴み、立ち上がった。

「あの、助けてくれてありがとうございます」

その言葉にカブトは顔を反らして返答する。

「べ、別に貴方を助ける為に来た訳じゃないから。偶々通り掛かっただけよ」

「おい」とナギが口を開いた。「お前、ヒナギクだろ?」

「……………?」

その問いにカブトは驚き焦る。

「えつ、そうなんですか?」

疑問の表情を見せるハヤテ。カブトは首を左右に振るい、脱兎の如く逃げ出した。

それから暫くして、氣を失っていたマリアが起き上がった。

「おい、ハヤテ! マリアが起きちまつたぞ!」

ナギの言葉に応えてハヤテが構える。

「あら? 私、どうしてこんな所に居るのかしら? マリアは首を傾げると、部屋を出ていった。

「失ってるみたいですね、記憶……」

「ああ……」

第2話（前書き）

取り敢えず第2話完成です。カブトの正体には気付いてる人も居るかも知れませんが、ここは敢えて伏せておきます。ヒーローは正体を明かさないのでしょう。

第2話

その日、ハヤテの下に一通の小包みが届いた。ハヤテはそれを部屋に持つていいき、開封をした。中にはベルトが一つ入っていた。ミカド・ハイパー・エナジーがZECTという対ワーム組織と共に開発したものである。そして、それと共に一枚の紙。そこには、ナギの祖父、三千院さんぜんいん 帝からのメッセージが書かれていた。

借金執事よ、このマスクドライダーシステムを貴様に託そう。これを使って孫を守ってくれ。

(おじいさん……)

ハヤテはベルトに手を伸ばし、腰に装着した。すると、背後にクワガタの形をした青い昆虫メカが出現した。

「…………!?」

気配に驚いたハヤテは咄嗟に振り返った。すると、ガタックゼクターというそのメカが彼にいきなり体当たりをした。

「うわ　っ！」

間一髪、避け切るが、しかし、ガタックゼクターは問答無用で次の攻撃を仕掛ける。

「うつ！」

ハヤテは避け切れず、攻撃を食らって怯んだ。

(一体こいつは何なんだ！？)

これが原因か？ そう思ったハヤテは、ベルトを腰から外した。すると、ガタックゼクターは消え去った。

都内的一角に位置する潮見高校。そこの校庭で、西沢にしづわ 歩が数匹のワームに囲まれていた。

「な、何なのかな！？」

歩はオドオドしながら周囲を見渡す。

「そんなに怖がること無いんじゃないかな？」

一匹のワームが言いながら歩に擬態した。

「えつ！？ 何！？」

驚き戸惑う歩。

「君、私と入れ代わってくれないかな？」

「い、入れ代わって何か良いことあるのかな？」

その問い合わせで一人の歩がニヤリと笑い、歩に殴り掛かった。

「きやつ！」

地面に転がる歩。

「安心して。あなたの分は私が生きるから」

擬態歩はワームに変態し、蜘蛛の能力を持つたアラクネアワーム・フラバスへ脱皮した。

すると、どこからともなく、カブトゼクターが飛来。ワームたちを襲う。

「くつ、私の邪魔をするのは誰かな！？」

フラバスはゼクターの飛んでいく先を向いた。そこには、人影らしきものが一つあった。

「歩には指一本触れさせない」

变身！ と、ゼクターを掴んでベルトにセット。人影は、カブト・マスクドフォームに变身した。

「お前たち、相手をしてやれ」

フラバスの言葉に、ワームたちがカブトの懷へ駆ける。

「キヤストオフ」

「Cast off」

カブトはゼクターの手を展開。装甲を弾き飛ばしてワーム共を粉碎した。

カブトローンが起き上がり、ライダーフォームに移行完了の音声が鳴る。

「Change beetle」

「何者かは知らないけど、私の邪魔をする奴は赦せないかな！」

フラバスはクロックアップすると、カブトの懷に移動して拳を放つた。

宙を舞うカブト。

「クロックアップ」

「Clock up」

カブトはサイドバックルを叩き、地面に片手を着いて跳ね上がり、両足で着地した。

フラバスは左右の腕に付いたウェブシユーターから蜘蛛の糸を飛ばした。

「はっ！」

カブトクナイガンで糸を切り裂くカブト。

「One , two , three」

カブトはゼクターのフルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒した。

「ライダーキック」

ゼクターホーンを展開。

「R i d e r k i c k」

高く飛び上がり、空中で前転して強力なキックをフラバスに放つた。

フラバスは避ける間もなく、必殺技を食らって爆裂霧散した。

「C l o c k o v e r」

カブトは倒れている歩に顔を向けた。

「う……うつ……」

歩が目を開けて起き上がった。

カブトはそれを見ると、安堵の溜め息を吐いて去っていった。

第2話（後書き）

次回は、ウカワームの記憶が戻ります。

第3話

休日の毎。都内の一角、銀杏商店街にある喫茶店さんぐら。マスターの加賀かが 北斗はアルバイトの歩に言つた。

「ねえ、ちょっと頼まれてくれない？」

「はい」

「うちに使つてる最高級のオリーブオイルを切らしちゃつたから買つてきてほしいの。いいかしら？」

「解りました」

歩はそう答えると、店を出て油を買いに向かつた。

練馬の東側の地を占める三千院家。その屋敷の前に散らばつた落ち葉を、マリアが箒で掃いていた。

「今日もいい天氣ですね」

雲一つ無い青空を見て思わず口にした。

「うわ っ！」

その時、一階の一室から少年が窓を突き破つて飛び出し、地面上に頭から落下した。執事のハヤテである。

「ハヤテくん、大丈夫ですか！？」

幕を放つて心配そうな様子で駆け寄るマリア。

「一体何があつたんですか？」

そう訊ねると、割れた窓ガラスの向こうからガタックゼクターが出て来てマリアを襲つた。

「きやあつー！」

マリアは驚いて転倒。その拍子に花壇の回りを囲う煉瓦に側頭部をぶつけた。

「うつー！」

呻き声を放つて意識を失つ。

「マリアさん……？」

起き上がり、顔を覗き込むハヤテ。その瞬間、マリアが目を開けた。そして、彼を凝視する。

「大丈夫ですか？」

ハヤテがそう訊ねると、起き上がったマリアに押し倒され、伸び掛けられた。

「あの、マリアさん？ 夜這いにはまだ早いですよ？」

「お前の言うマリアの 人間の心は封じ込めた」

「えつ……ー？」

「お前のお陰だ。感謝の証しにお前を仲間にしてやろう」

「……マリアさん、頭打つて可笑しくなりました？」

その問いに応えて、マリアはウカワームに姿を変えた。

「…………ー？」

すると、どこからともなく、緑色のサナギ体ワームが現れた。

「手下がお前に擬態したいそうだ」

「悪いですが断ります」

ハヤテはウカワームと上下を反転させた。

「生身の人間が私に適う筈がない」

ウカワームは両足でハヤテを宙に蹴り上げ、起き上がってクロツ

クアップ。飛び上がり、静止する彼を地面に叩き付けた。

がはっ！ 吐血するハヤテ。ウカワームは着地と同時にマリアへ変化した。

「素直に擬態される道を選べば痛い思いをしなくて済む」

「ですから、断ると言つたじゃないですか！」

ハヤテは覚束無い足取りで立ち上がるも、田にも留まらない速度でウカワームに殴り倒される。

「もう駄目だな」

ウカワームは振り返り、「お前の好きにしよう」と、後ろに倒れるサナギ体に言った。

サナギ体は横たわるハヤテに近付き、胸倉を掴んで体を持ち上げ、

一思いに胸を貫いた。

「うつ！」

力を失い、俯くハヤテ。即死だつた。

サナギ体はハヤテの亡骸を捨てると、同時に彼へ擬態した。

「行くぞ」

マリアに姿を変えたウカワームが、ハヤテに擬態したサナギ体を横切りながら言つた。

「待つて下さい、マリア様」

擬態^{ハヤテ}がマリアの後を追い掛け……よつとした瞬間、桃色長髪の少女が現れた。白皇学院現生徒会長のヒナギクである。

「……さない」

呟くヒナギク。

「え？」

「赦さない……。よくも、よくもハヤテくんを つ！」

ヒナギクは擬態を睨み付けると同時に飛来したカブトゼクターを掴んだ。

「変身」

ベルトにゼクターをセットしてカブト・マスクドフォームに変身。擬態に近付くと同時にカブトクナイガンを振り被る。

「ヒナギクさん、まさか僕を消すんですか？ そんなことしたら、彼の記憶も一緒に消えちゃいますよ」

その言葉に、振り下ろされたカブトクナイガンが既の所で止まつた。

田の前のハヤテはニヤリと笑い、サナギ体ワームに変態。殴り掛かってきた。

「うつ！」

怯んで躊躇めき、後退するが、直ぐに立ち直つて銃口を向けた。

「無駄ですわよ？」

その時、背後にマリアが現れた。

「あなたには彼を撃つことは出来ない」

「…………！？」

振り返り様に銃口を彼女に向けるカブト。

「あなたなど、私の敵ではありませんわ」

マリアはそう言ってウカワームに変態。クロックアップでカブトの懷へ移動して殴り飛ばした。

「うわっ！」

宙を舞うカブト。

「キヤストオフ」

カブトはゼクターホーンを展開。

「C a s t o f f . C h a n g e b e e t l e」

装甲が弾け飛び、カブトホーンが起き上がる。

地面に片手を着き、全身を一瞬跳ね上げて半回転して着地するカブト。

「クロックアップ」

サイドバッклルを叩いた。

「C l o c k u p」

クロックアップした二人は、あつという間にサナギ体の前から姿を消した。

（負けないで下さい、マリア様）

サナギ体がそう祈った刹那、背後で光が放たれた。

「…………！？」

何事かと思い振り返つてみると、ハヤテの腰に巻かれたベルトが発光していた。

「…………」

サナギ体はそれを凝視。すると光りが消え、ハヤテが立ち上がりてこちらを向いた。

「擬態は断ると言ったでしょう？」

ハヤテは顔を顰めると、右手を頭上に掲げて飛来したガタックゼクターを掴んだ。

「僕を資格者として認めてくれるんですね？」

ハヤテはゼクターを数秒見つめ、「変身！」と、ベルトにセットした。

「Henshin」

音声が放たれ、ハヤテはガタック・マスクドフォームに変身する。サンギ体は全身を赤く染め上げると、脱皮をしてアリジゴクを模したジエノミアスワームになった。

ガタックは両肩のガタックバルカンを連射した。しかし、ジエノミアスワームがクロツクアップ。全ての弾丸は外れてしまった。「取り敢えず今日の所は見逃してあげます。ですが、今度会った時はあなたの命とライダーシステムは頂きます」

ジエノミアスワームはそう言つと、ガタックの前から姿を消した。「Clock over」

と、同時にカブトが空から下りてきた。

「シオマネキのワームは？」

ガタックの問いにカブトは振り返り様に答えた。

「逃げられたわ」

ところで　と、続けるカブト。「あなた、何者かしら？」

ガタックゼクターが外れ、変身が解けるハヤテ。

「ワーム？」

首を傾げるカブトに、ハヤテは両手を前に出して左右に振った。

「違いますよ！ 人間です！」

「……死人が生き返る訳ないでしょ？」

「ベルトのお陰です。僕に化けたワームは捨て台詞を吐いて逃げていきました」

「そんな事言わても信じられないわ。何か本物と判る証拠を見せ

て」

「……無理です」

その回答にカブトは溜め息を吐いた。そして、ハヤテの前から去つていった。

「ああ　っ！」

唐突に叫ぶハヤテ。

「今日バイトじゃん！」

彼は慌てた様子で駆けだした。

敷地から出て、銀杏商店街へ向かう。

喫茶店どんぐりに着いた。

「すいません、遅くなりました！」

中に入り、マスターに頭を下げた。

「ああ、ちょうどよかつたわ。歩ちゃんがお使いに出たつくり、帰つてこないのよ。オリーブオイル買いに行かせたんだけど、どうしたのかしら？」

「じゃ僕が搜してきますよ」

「そうお？　じゃ悪いけど、お願ひするわ」

はい、ハヤテはそう返事をして店を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3577f/>

【仮面ライダー】ハヤテのごとく！【カブト】

2010年10月10日19時12分発行